

## 村祭りの風景から

岩波書店の『科学』という雑誌は、あまり読むことはないが、2018年8月号で原発事故を特集しており、図書館で手にとった。論文をいくつかコピーして読んだが、写真のフォトジャーナリスト・豊田直巳さん「これは『復興』ですか？」にも目がとまった。福島をいまを考えるうえで示唆に富む。写真と解説を紹介したい。

「例大祭復活 絆再び 飯館・大雷神社で10年ぶり」と地元紙（福島民報）が報じたお祭り。全国紙も「飯館村の大雷神社で10年ぶりの練り歩き（朝日新聞）、「飯館 総代や氏子ら震災前と同じ……大雷神社で例大祭が復活」「福島第1原発事故 飯館・大雷神社、10年ぶり例大祭 地域の絆、確かめ合う/福島」（毎日新聞）とのタイトルで「明るい話題」の記事にした。それに水をさすような記事を私が書いていいのかとも考えた。「みこし囲む 笑顔の輪」（河北新報）から、「地元のことを何も知らないよそ者が」と冷たい視線を浴びそうな写真を掲載することに躊躇がないと言ったら嘘だ。

というのも表紙を含む全32ページのうちの9ページをこの祭りの紹介に割いた村の広報誌はもちろん、上記の各紙は、放射能汚染度を詰めたフレコンバックの写真は1枚も掲載しなかったからだ。しかし、祭りに参加した誰もが目の前に広がる、その“異様な光景”を目にしなかったはずはないのだ。写真撮影には「切り取る」という言葉がある。何を写し、あるいは写さないかは、カメラではなくカメラマンの意思と意志で決めるのだ。新聞が「写さなかった」風景にも目を向けてほしい。

写真左上一国などからの補助金で行なわれている「農地保全」などが目的の菜の花が満開を迎えている中を神輿が通る。その向うに放射能汚染土の「仮置き場」が見える。

右上一大雷神社の参道に並ぶ各行政区のテントの前で舞われた地元神楽団の神楽を初めて見る子どもたちも、「避難先」や転居先から「一時帰宅」した。

右中—大型連休の5月3日と4日の2日にわたって、約120人の氏子などが山車、神馬、御神輿などで行列を作り、村の南西部の飯樋地区のフレコンバックの「仮置き場」を巡るように練り歩いた。

右下—地元青年がほとんど参加しない中、飯館村と「復興連携プログラム」協定を結んでいる福島大学・行政政策学類のゼミ学生が「お手伝い」で、一時帰宅した子どもたちと神輿を担いだ。



(2018年8月11日)